

# 2025

## 龍谷大学学生気候会議 提言書

主催：龍谷大学学生気候会議実行委員会

共催：龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター(LORC)

サステナビリティ推進室

運営協力：龍谷大学学生気候会議OCS

提言書とりまとめ：特定非営利活動法人 気候ネットワーク



1. 本提言書の背景と目的
2. 提言
  - 2-1. グループワークによる成果と提言
    - 2-1-1. 龍谷の森の利活用に対する提案
    - 2-1-2. 居心地の良い空間作りと脱炭素の推進化についての提案
    - 2-1-3. 分野別での提案
    - 2-1-4. 学生団体OCsによる考察と提言
  - 2-2. 「学生気候会議 意見集約」からの提言
3. 参加学生の状況と学びについて
4. 総括
5. 資料編
  - 5-1. プログラム概要
  - 5-2. 運営体制
  - 5-3. 過去提言書の進捗確認の概要（OCs）
  - 5-4. ファシリテーション・グラフィック成果物
  - 5-5. メディア成果物掲載一覧
  - 5-6. グループワークの提案内容の詳細
  - 5-7. 「学生気候会議 意見集約」と 回答結果

## 1. 本提言書の背景と目的

気候変動対策と脱炭素化は、人類共通の喫緊の課題であり、その対応は国や自治体のみならず、大学を含むあらゆる主体に求められている。近年、異常気象の頻発やエネルギー価格の高騰、国際的な政治・経済情勢の不安定化などにより、気候変動対策を取り巻く環境は一層複雑化しているが、こうした状況下においても脱炭素社会への移行を着実に進めていくことの重要性は揺らいでいない。むしろ、地域社会に根ざした主体による具体的な実践と、その担い手となる人材の育成を同時に進めていくことがこれまで以上に求められている。本学は、2039年の創立400周年に向けた「ゼロカーボン・ユニバーシティ」宣言のもと、京都市脱炭素先行地域の取り組みにおける伏見エリアの主要アクターとして参画するなど、地域とともに脱炭素化を推進してきた。

龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター（LORC）、学生団体 OCs、サステナビリティ推進室は、こうした大学の取り組みに学生の意見を直接的に反映させることを目的として、欧州で展開されてきた気候会議（climate assemblies）の手法を参考に、「龍谷大学学生気候会議」を継続的に開催してきた。本学が全国に先駆けて実施してきたこの学生気候会議は、単なる環境教育の場にとどまらず、大学の気候ガバナンスに学生が主体的に関与する仕組みとして発展してきており、提言の一部が実際の施策として実現してきたことは、その実効性を示すものである。

第5回となる今回の学生気候会議では、これまでの議論の蓄積を踏まえつつ、「ゼロカーボン・ユニバーシティ」を掲げる本学の脱炭素化の取り組みを学生の視点から評価・検討することを基本目的とした。その上で、瀬田キャンパスにおける「龍谷の森」の活用や、深草キャンパスの新棟建設と「深草の森」コンセプトを題材とした空間のあり方の検討など、大学の具体的な空間・施設計画を対象として議論を行った。さらに、エネルギー・建物、通勤通学、教育、地域連携というテーマについて、大学の脱炭素化に向けた実践的な方策を検討した点に本会の特徴がある。これにより、大学の将来構想と日常的な学生生活の双方を接続し、脱炭素化と居心地の良いキャンパス環境の両立という観点から提言を導出することを目指した。

本提言書は、学生気候会議におけるグループワークの成果、参加学生個人の意見集約、会議前後のアンケート分析、そして専門家および運営委員会からの提言を基に作成したものである。学生が地域社会の一員として日常的にキャンパスで生活し学ぶ中で得た視点からの提言は、本学が地域の脱炭素化を先導する大学として今後の取り組みを進めていく上で、重要な示唆を与えるものである。

本学が教育・研究機関としてのみならず、地域社会の持続可能な未来を共創する主体としての役割を果たしていくために、本提言書が大学の気候ガバナンスのさらなる深化に資することを期待する。

第5回龍谷大学学生気候会議運営委員会一同

## 2. 提言

### 2-1. グループワークによる成果と提言

今年度の気候会議では、1日目に『龍谷の森』の活用をテーマとして、大学内での取り組みや地域連携を通じた龍谷の森の活用について議論した。カードゲーム、講義とフィールドワークを通して気候変動の基礎知識や森林保全に関する理解を深め、アイデアをグループごとに話し合った。2日目は、2025年に完成した深草キャンパスの新棟における居心地の良い空間づくりと、『深草の森』づくりにおける脱炭素化について、1日目は別のグループで話し合いを行った。

#### 2-1-1. 龍谷の森の利活用に対する提案

1日目のグループワークは瀬田キャンパスで行い、龍谷の森を利活用するための具体的なプロジェクトについてA班からE班の5つのグループを作り議論を行った。

A班は、龍大生や地域の方々に龍谷の森について広く知ってもらうことが大切であると考え、ハイキング、学び、活動の3つの視点で活用していくことを提案した。具体的には、スタンプラリーや森についてのパンフレット設置、子供たちが落ち葉を使うなどした自然に触れるアクティビティを学内及び地域向けに実施することである。「龍谷の森」に入り自然を経験することで、自然環境を守ることの重要性を理解し、地域の人々が自ら環境保護活動に参加できるようになることが「龍谷の森」を活用する意義の一つであると考えている。

B班は「森を残す」だけでなく、手入れし、使い、次につなげることの大切さを知るきっかけづくりを目的とした取り組みを提案した。龍谷の森を舞台に、学生や地域の人たちが森とふれあいながら学ぶことができる取り組みとして、龍谷の森で行う森の手入れ体験を実施するほか、選択式のプログラムとして、伐採した木を使ったアクセサリーやお茶碗などのものづくり体験や間伐木を使ったキノコ栽培体験などを行うことを提案した。

C班は、山菜採り体験や龍谷の森の木材・廃材を使った歩道の手作りなどのイベントの実施のほか、立ち寄りスポットの機能を備えるコミュニティ食堂や Green Deck を龍谷の森に設置すること、さらに森の利活用の視点から森で育てた食材の販売やたけのこ掘り、森の資源を活用した製品の開発・商品化をするという活用方法を提案した。龍谷の森の日常利用が少ないことや、地元の方が使わないこと、地域連携が生まれていないことに着目し、地域住民との交流の場を作ることを重視した提案となっている。

D班は、地域住民を対象に学びの場として森を確立させ、自然を身近に感じてもらうため定期的にイベントを開催すること、さらに森林祭り、森のカフェなどを設置して心地よい場を提供するほか、ツアーを開催するなどして認知度向上にも繋げるという提案をした。学習、イベント、そして整備に着目し、山を多角的な視点から見つめ活用する。

E班は、「人と森との共生（ともいき） 龍谷ツアー」と題したプロジェクトを提案した。大人や学生向けには、農家と連携したしいたけ栽培などを行うほか、ツアー企画として、森を歩きながらの体験活動や仏教的要素を取り入れたものづくりなどを提案した。子供向けには、森の資源を活用した正月のしめなわ、おせちの飾り作りなど、森に親しむ体験を提供することを提案した。これらは、学部横断で学生が関わる運営をすることや龍谷大学らしい視点(仏教)を体験的に学べる構成で行うことが特徴である。



## 2-1-2. 居心地の良い空間作りと脱炭素の推進化についての提案

2日目は深草キャンパスで実施し、1日目とは別の1班から4班の4グループで議論を行った。2日目午前は深草キャンパスの新棟における居心地の良い空間作りについて、午後は分野別による大学の脱炭素について話し合った。

グループ1は、「る」の森<sup>1</sup>の一階の密集や日照の偏り、新棟側の利便性不足を課題ととらえ、密集度の可視化や店舗配置の分散、緑化空間の活用、光環境に応じたリラックス・学習空間の分離などを提案した。脱炭素化では紙使用量の多さや認知不足にも問題を感じ、授業などでの周知、発電量の可視化、環境表彰、紙ポイント削減や古紙回収設置などで行動変容を促す。

グループ2は、深草キャンパス新棟を有意義に活用するため「脱炭素」「自然共生」「居心地」の3視点から施策を提案した。デポジット容器や紙削減でゴミを減らし、環境行動を可視化する仕組みを導入する。キャンパスの混雑度マップや森の手入れ、木材ワークショップなどで快適性と地域交流を促す。発電量の見える化により学生主体の脱炭素化を推進する。

グループ3では、善行をポイント化する「功德プロジェクト」が提案された。これは、リユースマグ利用や気候会議参加などの環境配慮をはじめとする社会貢献行動を仏教的視点に基づく「善行」と定義し、その実践に応じて「徳得ポイント」を付与・可視化する包括的な仕組みである。善行をポイント化することで可視化やランキングにより参加意欲を高める。また「陰徳報告制度」をつくり規定された「善行」以外の自主的な行動も促す。獲得ポイントは、龍谷の森での名入り植樹、オリジナルグッズや野菜との交換、生協電子マネーへの変換などに活用する構想である。

グループ4の提案は、「使いこなせる・リラックスできる」大学空間の実現を目指し、学内施設をまとめたフード・空間マップを作成し情報を一元化することで、人の流れを分散し混雑を緩和することを提案したほか、新棟への壁面緑化で景観向上と遮熱効果を図ることを提案した。これにより居心地向上と環境負荷低減、施設の有効活用、地域に開かれたキャンパスの実現が期待できるほか、「る」の森の混雑や食堂の過密、教室環境の不快感、施設情報の分かりにくさといった課題を解決に導く。

## 2-1-3. 分野別での提案

2日目の後半は、各グループごとに「建物・エネルギー」「教育」「地域連携」「通勤通学」という4つのテーマを割り当て議論を行い、最後に全体で共有する機会を設けた。以下、主要な提案を一部抜粋しリストアップしたものである。

### 【建物・エネルギー】

- ・小中高生向けに空き教室開放（週末・長期休暇）
- ・龍谷の森の資源を使ったハンドメイキングイベント
- ・龍大が発電する再エネの余剰電力の寄付
- ・図書館・プールを長期休暇限定で開放
- ・龍谷おにごっこの実施
- ・瀬田ドームを地域のスポーツクラブに貸出
- ・瀬田のキッチンで料理教室
- ・餅つき大会（龍谷の森の木を使った杵と臼）
- ・大宮の伝統建築×オープンカフェ
- ・深草キャンパスの大型モニターの活用<sup>2</sup>（パブリックビューイング、映画鑑賞会、龍谷ドキュメンタリー上映、ゲーム大会）

### 【教育】

- 大学生が幼稚園、小学生、中学生、高校生と年齢に応じた教育の提供を行い、教育を受けた人が次の教育提供者として担い手になる循環を生み出す構想を前提とし、具体的な取り組みとして以下を提案する。
- ・大学生による環境に関する絵本や紙芝居の作成
- ・「仏教SDGs概論」の授業をポスターや授業の感想を学生が共有できるサイトの開発
- ・ボランティアセンターを通じた野外活動の実施
- ・「好きなこと×脱炭素」でサステナブルなことに取り組めることを周知する機会の提供

### 【地域連携】

- ・共創HUBを研究者・企業・他大学、修学旅行生や課外学習生などとの連携拠点とする
- ・IoTゴミ箱<sup>3</sup>等を活用したごみ問題対策
- ・深草キャンパスでの防災を意識したキャンパス内スタンブラー
- ・学内でもシェア教科書・シェア本をはじめとした「シェア」に関する取り組みの拡大
- ・地域の人に大学が余っている教室を貸し出し、大学のクリーンなエネルギーを地域の人に余すことなく利用してもらおうシステムを作る。
- ・芸術系大学、伝統工芸系学校とのデザイン連携
- ・他大学の環境系取り組みとの情報共有・報告会

### 【通勤・通学】

- ・龍谷大学のスクールバスをすべてEVバスにする
- ・CO<sub>2</sub>排出量を削減し、大学の環境配慮の姿勢を目に見える形で示す。
- ・瀬田駅—瀬田キャンパス間にスクールバスを運行する
- ・地域住民も利用できる電動自転車を用いたシェアサイクルを導入する

1. 龍谷大学深草キャンパスに新たに設置されたスペースであり、「みつける」「かたる」「つながる」「はじまる」など様々な意味を込めて「る」の森と呼ばれている。

2. 2024年度の提言書ではモニターを廃止するべきとの声が上がったが、今年度の学生は廃止よりも新たな活用法を模索した。

3. センサーと通信機能を備え、ゴミの蓄積量をリアルタイムで把握・管理できるスマートゴミ箱

## 2-1-4. 学生団体OCsによる考察と提案

学生気候会議実行委員会OCsは第2回学生気候会議から学生メンバーとして運営に参画してきた。OCsは若者に気候変動に関心を持ってもらうための活動に取り組むとともに、大学や地域と一体となり、より豊かな地域社会を作ることを目指している。以下にこれを考慮した視点から、OCsからあらためて今回の学生気候会議を踏まえた持続的な脱炭素に向けた提案をしたい。

まず龍谷の森についてであるが、龍谷の森を研究フィールドとして保全することに加え、ハイキングや森のツアー、自然観察、農家と連携したしいたけ栽培など、多様な体験活動を展開し、学生・地域住民・子ども・農家が共に関わる学びと交流の場としての活用を推進したい。学生主体の運営を基本とし、授業・ゼミ・サークルが協力して森の手入れから活用までを担い、仏教的要素を取り入れたワークショップや地域向けイベントを実施することで、森を身近に感じられる環境を整える。さらに、伐採からものづくり、植林まで一連の循環を体験できるプログラムを通じて、森を「守る・使う・つなぐ」意識を育て、地域との連携強化と環境保全への主体的な参加を促すことができる体制を実現させるべきである。

また、2日目にグループ3が提案した功德（得）プロジェクトの導入に関する提案について深めたい。専用アプリ等を通じてポイントを管理し、学生が主体的にカーボンニュートラルへ寄与できる環境を構築する。具体的な善行の内容として、リユースマグ利用や気候会議への参加、教科書サブスクの利用、環境ボランティアへの参加、ジムでの漕ぎ発電への挑戦などが想定される。規定の項目以外で行われた社会貢献についても、自ら報告し正当な評価を受ける「陰徳報告制度」を設けることで、多様な善行を網羅的に拾い上げる。獲得したポイントの活用先である「お布施一覧」を作り、龍谷の森での名入り植樹や、大学独自のマグカップ、コースター、野菜等との交換を盛り込む。本プロジェクトは多岐にわたる要素を含むため、完全な導入には相応の時間を要する可能性があるが、まずは実現可能な施策から着手し、段階的に具体的な制度へと昇華させていくべきである。

龍谷大学が学生と共に取り組んでいくためには、好きなことや楽しいという体験と脱炭素を掛け合わせたイベントを実施することが重要である。例えば「龍谷の森」の間伐材を活用した杵と臼づくりと餅つき大会の開催、深草キャンパスにあるモニターで環境問題に関する映画鑑賞会、そして大宮キャンパスの伝統建築を活かしてオープンカフェを開催し、地域の人々と共に気候変動や脱炭素について考える機会などを提供するのはいかがでしょうか。これらのイベントを実施することで脱炭素に対するハードルを下げ、学生がより主体的に気候変動対策に取り組む機会となることが期待できるだろう。また、環境問題に関して有益な事業を展開している企業を招待して講演会を行う。これはキャリアとして結びつくことを伝える機会となり、学生が持つ環境や気候変動に対する関心を長期的に育てていくことに貢献するだろう。

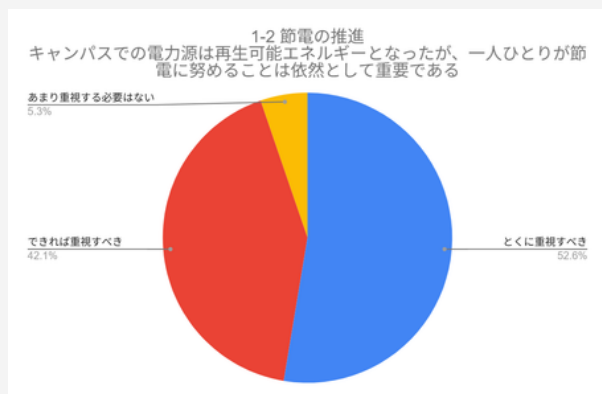
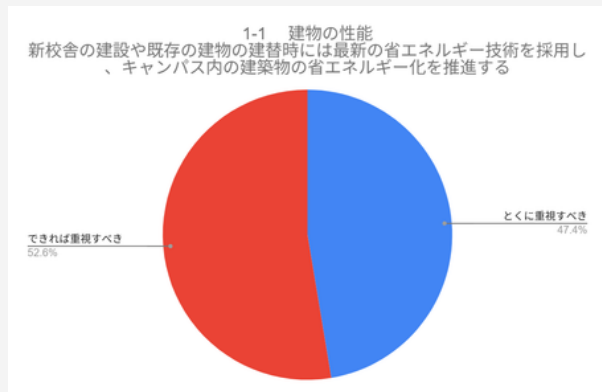
本提案は、学生・地域・大学が一体となり、楽しさや学びと結びついた持続的な脱炭素の仕組みを構築しようとするものである。日常の善行を可視化することや、参加のハードルを下げることで、主体的かつ継続的な気候行動を地域や学生などの様々な主体に根付かせることを目指すことが出来るのではないだろうか。



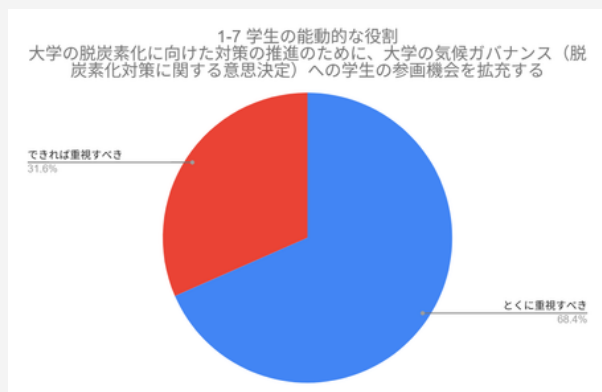
## 2-2. 「学生気候会議 意見集約」からの提言

気候会議2日目の最後に、参加学生に18の項目についてアンケートを行った。15の項目については、どの程度重視するかについて訪ね、3つの項目は自由記述とした。回答者数は19名であった。

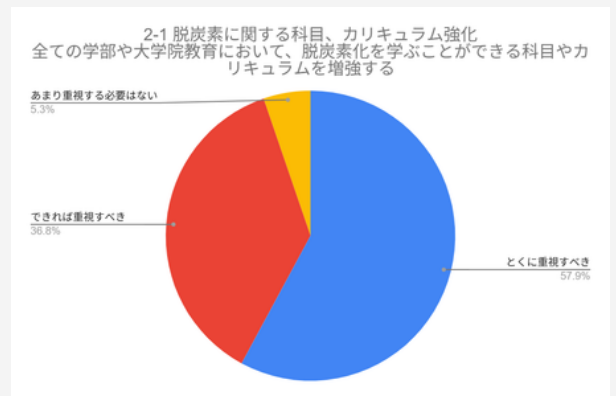
まず、建物の性能において省エネルギーを推進をすることについて全員が肯定的な考えを示した。本学では、2023年から大学で使用する電力がすべて再生可能エネルギー由来のものへ切り替わったが、一人ひとりが省エネルギーに努めることについても、概ね肯定的な意見が見られた。



また、大学の脱炭素に向けて学生が気候ガバナンスへ参画する機会を拡充すべきだとする声が、回答者全員から得られた。今後も学生気候会議の継続に加え、大学の気候ガバナンスに学生を積極的に巻き込んでいく必要があるといえる。



脱炭素に関する科目やカリキュラムの強化については強化を求める意見が大多数を占めた。学生がさらに気候ガバナンスに参画するにあたり、学生が脱炭素に関する知識をある程度有していることが求められるため、既存のカリキュラムの強化に加え、全学部や大学院教育において、すべての学生が偏りなく脱炭素について学ぶことができる仕組みを構築することが求められるだろう。



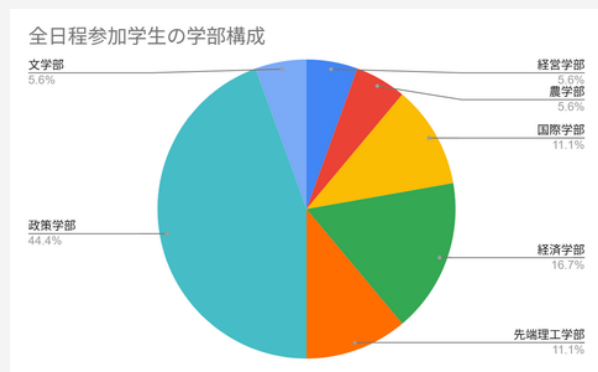
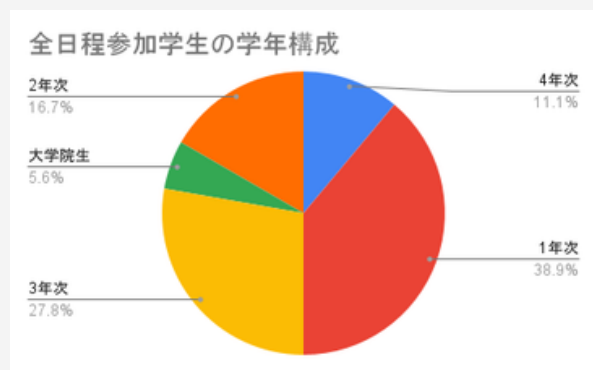
自由記述として、「脱炭素社会への挑戦において、あなたはどのような人材になりたいですか」という問いに対する回答は、回答者によってさまざまであったが、回答者は共通して環境問題に関心を持ち、他人任せにせず発信やプロジェクトを自ら実行できる人材を目指していることが読み取れた。周囲に影響を与え多様な人々を巻き込みながら、現実的かつ豊かなアイデアを多様な立場の人と協力して形にしたり、将来は脱炭素社会や環境保護、地域課題の解決や環境教育の普及を通じて持続可能な社会の実現に貢献したいと考えていることがわかった。理念と現実、個人と社会、発想と実行を橋渡しできる存在こそが、次世代の脱炭素社会を担う人材像として共有されていると言える。

最後に、龍谷大学の位置する京都や滋賀の脱炭素化やカーボン・ニュートラルへの挑戦について思うことを自由に記述してもらった。参加した学生は、多くの人を巻き込むには学生が主体となる参加のきっかけづくりと情報発信が重要だと感じており、さらなる発展の鍵は「参加者の拡大」「連携の深化」「成果の可視化」にあるという共通認識が読み取れた。すなわち、地域・大学・社会をつなぐ開かれた協働モデルを構築し、その成果を広く共有することが、この地域を脱炭素先進モデルへと発展させる重要な条件であると考えている。

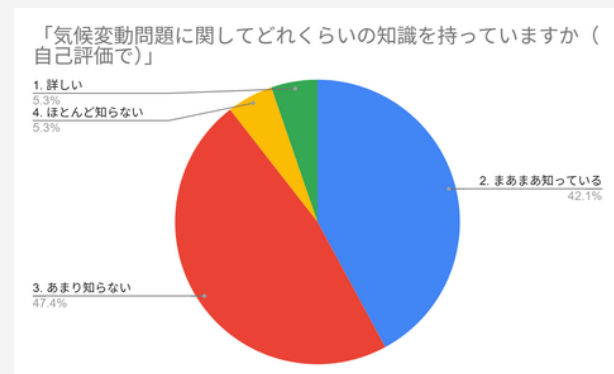
### 3. 参加学生の状況と学びについて

第5回（2025年度）の参加人数申込者は30名（運営スタッフである学生団体OCs 6名は含まず）で昨年度と比べて学部と学年ともにばらつきが広くみられた。申し込み時点では昨年よりも参加者は多かったが欠席者も多く参加者自体は昨年よりも少なかった。

当日の参加人数は、23人（1日目）、19人（2日目）であり、うち全日程参加学生は19人(OCs 6人)であった。全日程参加学生の所属学部（人数）については、文学部（1）、法学部（0）、社会学部（0）、経済学部（3）、経営学部（1）、国際学部（2）、政策学部（8）、理工学部（2）、農学部（1）であり、全日程参加学生の学年（人数）は4年生（2）、3年生（5）、2年生（3）、1年生（7）であった。



以下に示す通り、開催前のアンケートでは、気候変動に関して詳しい学生ばかりでないことがわかる。多様な学部・学年から参加し、気候変動に関する知識もさまざまであることがわかる。



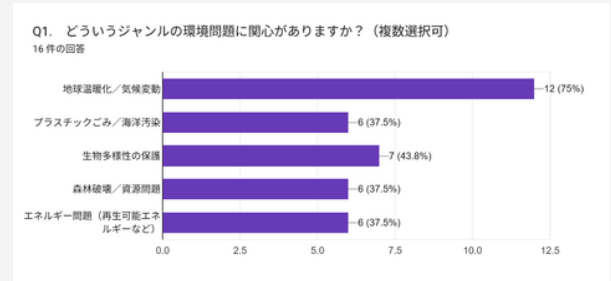
主な会議への参加理由は「気候変動問題に関心があったから」「龍谷大学のサステナビリティに向けた取り組みに関心があったから」といったように、比較的問題意識が高かったことが見て取れる。多様な意見を集約するという気候会議の主目的にかなった参加者構成であると言える。

会議後の感想については、「楽しかった」「勉強になった」と全員が肯定的な感想を持っており、学年や学部を越えた仲間との議論に価値を感じている感想が多かった。また、「他の人のアイデアをまとめて言語化して発表することの難しさを学んだ」という複数人による議論ならではの意見もあった。「地球環境の重要性を認識できた」など環境問題を「自分事」としてとらえる意見もみられた。

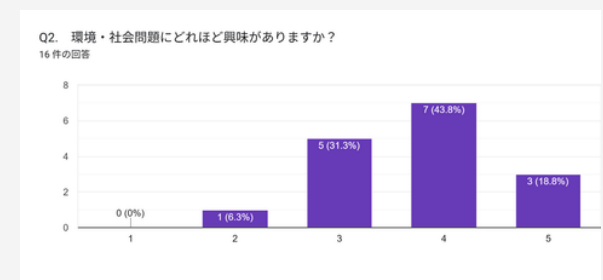
特に印象に残った学びについては「龍谷大学の脱炭素への取り組み」や「対話や話し合いの重要性」に加えて、今年度は多くの学生から「龍谷の森フィールドワーク」があげられており、昨年度に引き続き瀬田キャンパスで実施したことをプラスにとらえていることがわかる。なお、次年度も学生気候会議へ参加を希望するかを聞いたところ、全員から参加する意思がある回答を得た。

一方で、参加学生を集めることが毎年課題となっており、教員ら大学側だけでなく、OCsや今年度の参加学生が中心となって、来年度以降持続的に参加学生を集めていくことが必要であろう。

今回1日目の事後課題としてOCsがアンケートを作成し、参加者23人のうち16人の回答を得た。どのようなジャンルの環境問題に関心があるかを聞いたところ、主に地球温暖化や気候変動や生物多様性の保護に関心が高いことが判った。



また、環境・社会問題にどれほど興味があるか聞いたところ、ほとんどの参加学生は興味を一定程度持っていることがわかった。無作為抽出対象者のうち参加者はごく少数であるが、今回初参加の一回生が多かったことから、徐々に問題意識は高まっているように見える。一方で、関心の低い層へのアプローチが今後の課題である。



※1に向かうにつれ「全く興味がない」、5に向かうにつれ「非常に興味がある」である。

## 4. 総括

2025年の学生気候会議も、昨年からの試みを継承し、1日目を瀬田学舎にて、また2日目を深草学舎にて開催した。異なったキャンパスで学ぶ学生たちが相互に交流し、対面で濃密な会話を積み重ねることの意味は大きい。今回の気候会議も、参加者にとって貴重な気づきの場となったことは大変喜ばしい。

2025年の深草キャンパスにての学生気候会議では、昨年は模型で見るしかなかった「る」の森を実際に訪れ、新たに設置されたスペースの活用の仕方についても思いをめぐらせた。この都市型キャンパスにできた新スペースが、「みつける」「かたる」「つながる」「はじまる」きっかけになることは大学関係者にとっては望ましいことである。

毎年学生気候会議ではこのような新しい取り組みも行ってきたが、その一方で初回から継続してキャンパスライフの脱炭素化という点についても引き続き検討してきた。今回の学生気候会議においても、普段あまり明確に意識しない気候危機について、参加学生がしっかりと考え、討議することの意義は小さくない。気候会議の場において大学のカーボンニュートラル宣言や、大学のエネルギー源の再生可能エネルギー転換について、学生たち自身も肯定的に受けとめている。しかしそれは他方で、日頃のカリキュラムが、持続可能性について総合的に学べるものになってないという危機の裏返しでもある。この点は参加した学生たちの中でもこれまででもまた今回も繰り返し指摘されてきた。

今回の参加学生たちの提言からは、将来の持続可能性の実現は、もはや苦しいことを耐え忍んで実現するというイメージではなく、瀬田の里山や深草の「る」の森を積極的に活用し、楽しみながらより居心地のよいキャンパスライフを実現するという以前よりポジティブなメッセージが込められている。脱炭素化に貢献するような行動を、例えばアプリによるポイント制の導入とその活用を通じて促すといった、インセンティブに着目した行動変容の促進は、以前の気候会議でも議論されてきた。インセンティブへの着目は非常に大切で、大学当局としても、このような学生たちの行動変容を後押しする姿勢が今後はますます求められる。その意味では今回の提言は議論から実現へと移りつつあることを示している。

このような肯定的な動きを今後ともより進展していくためには、大学によるさらなる体制強化が必要であろう。

まず第一に、サステナビリティ推進室を中心とした大学の体制を強化し、カーボンニュートラル宣言を「言いつばなし」に終わらせるのではなく、実効性をもったものとする必要がある。そのためにも、学生気候会議の提言の実効性の確保のために、サステナビリティ推進室を中心とする大学の組織を引き続き強化し、学生気候会議の開催、会議からの提言書が政策に反映される仕組みづくりを確実に確保していくことは依然として重要である。

第2に外部との連携強化に向けた情報発信力の向上である。今回の学生気候会議の開催に前後して、同様に会議を開催した滋賀県立大学ならびに武蔵野大学の関係者の訪問があった。このように本学が継続的に開催してきた学生気候会議は、他大学へも徐々に普及しつつある。より社会的な大きなインパクトへ繋げるためには、大学自身の情報発信力の向上を一層はかり、外部との協働がより深化していくことが求められる。

このような進展によって、本学が学内外にたいして脱炭素化を着実に推進していくことに貢献できるであろう。そのような先に、本学が理念として掲げる仏教SDGsの実現も近づいてくるのであろう。そうやって初めて創立400年の記念の年である2039年までのカーボンニュートラルが実体を伴ったものとなり、本学がまわりからもさらに一層注目される大学となるのではなかろうか。



## 5. 資料編

### 5-1. プログラム概要

#### 【1日目】

開催地 瀬田キャンパス

智光館地下1階 ラーニングcommons

9:15 オープニング

9:45 アイスブレイクを兼ねたカードゲーム

進行：京都府地球温暖化防止活動推進センター

副センター長 木原 浩貴 氏

気候ネットワーク 上席研究員 豊田 陽介 氏

12:00 休憩

12:05. 基礎知識提供

「気候変動とSDGs・サステナビリティ」

講義：国際学部 教授 斎藤 文彦 氏

12:30 昼食休憩

13:30 瀬田キャンパス・龍谷の森の紹介

講義：先端理工学部 教授 奥野 哲士 氏

同 准教授 横田 岳人 氏

13:45 龍谷の森フィールドワーク

案内：横田 岳人 氏

14:55 休憩

15:15 グループワーク

龍谷の森活用をテーマにしたワークショップ

16:25 成果発表

16:40 教員からのコメント

16:50 ファシリテーショングラフィックの一言解説

解説：特定非営利活動法人グローバル人材開発センター

戦略総務主任／グラフィッカー 外崎 佑実 氏

16:55 ラップアップ

17:00 1日目終了

1日目は、多様な学部、学年から参加者が瀬田キャンパスに集まった。参加した背景や気候変動分野に関する知識の深さも多種多様であったが、多角的な視点から大学の脱炭素を考える機会となり、また普段は他学部や学年との交流が少ないことから、学生にとって新たな出会いやアイデアの創出の場となった。

午前の部では、企業や行政、農家やNPOなど様々な実際のステークホルダーになりきって、それぞれの利益を守りながら社会全体の脱炭素を目指す、「2050カーボンニュートラル」というカードゲームを行った（進行：京都府地球温暖化防止活動推進センター副センター長、気候ネットワーク上席研究員）。参加した学生からは、気候変動問題を自分事としてとらえるきっかけになったという声が聞かれ、これから2日間の議論に向けたインプットとなったほか、議論を共にする仲間と打ち解ける機会となった。

カードゲームの後、国際学部の斎藤文彦教授より、気候変動の現状とサステナビリティの取り組みについての基礎知識が提供され、学生が議論に積極的に参加出来るようにするためのインプットの機会となった。

午後の部では、先端理工学部の横田岳人准教授から、瀬田キャンパスに隣接する「龍谷の森」について、実際に森を歩きながら森の役割や生態系の保護や創出などについて解説を受けた。道の整備が行き届いたエリアだけでなく、森を少し奥に進んだエリアにも足を伸ばし、植生や生物多様性の保全、また樹木の活用方法などについても学んだ。また、森の中だけではなく滋賀県産木材を利用した「Green Deck」という施設も訪れ、実際に森林が活用がされている事例を学んだ。

フィールドワークを受けて、さらに森のCO2収支に関する講義が提供された。林立する樹木の適切な管理（高木の伐採と低木の手入れ）の重要性を学び、龍谷の森の活用を大学の脱炭素目標達成に向けた一つの手段として捉えるきっかけとなった。



## 【2日目】

開催地 深草キャンパス 慧光館201教室

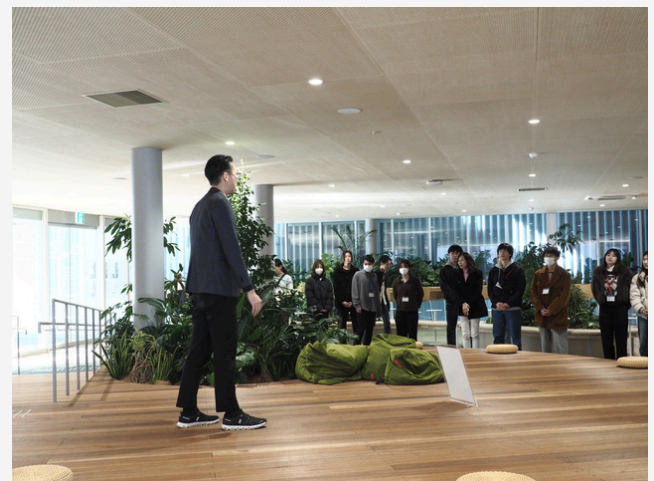
- 9:30 オープニング
- 9:35 龍谷大学のゼロカーボン・ユニバーシティ  
ネイチャーポジティブ宣言に関する取り組みについて  
講義：副学長／政策学部 教授 深尾 昌峰 氏
- 9:55 キャンパスツアー  
案内：サステナビリティ推進室 課長 原田 正誓 氏
- 10:45 休憩
- 10:55 グループワーク  
テーマI：深草キャンパスの新棟建設/深草の森づくりに  
おける脱炭素化/居心地の良い空間づくりについて
- 12:05 成果発表
- 12:20 テーマIIに関するコメント
- 12:30 昼食休憩
- 13:30 過去の気候会議による提言内容の進捗状況報告  
報告：龍谷大学学生気候会議実行委員会OCs  
岩佐 祐吾 氏
- 13:50 テーマIIに関する論点提起  
講義：気候ネットワーク 上席研究員 豊田 陽介 氏
- 14:00 グループワーク  
テーマII：エネルギー・建物、通勤通学、教育、地域連  
携の4つのテーマに関する脱炭素化に関する  
アイデア
- 15:10 参加者の意見集約
- 15:30 成果発表
- 15:50 グループワーク及び全体に関するコメント
- 16:00 ファシリテーショングラフィックの一言解説  
解説：特定非営利活動法人グローバル人材開発センター  
戦略総務主任／グラフィッカー 外崎 佑実 氏
- 16:05 チェックアウト
- 16:30 クロージング

2日目は、深草キャンパスで開催された。午前の部の開催にあたり、深尾昌峰副学長より龍谷大学のゼロカーボン・ユニバーシティとネイチャーポジティブ宣言に関する取り組みについて共有がされた。深尾副学長は、学生気候会議の取り組みが実際の大学のガバナンスに反映されている点を強調し、学生の積極的な参画とユニークなアイデアの共有を歓迎した。

次に、サステナビリティ推進室課長の原田正誓氏より、深草キャンパスに建設された新棟に関して、その脱炭素の取り組みなどについて情報共有が行われ、続いて実際にキャンパス内を歩くキャンパスツアーが実施された。龍谷ソーラーパーク（屋根置き太陽光パネル）を見たり、2号館北側新棟「灯炬館」内にある、「る」の森について、その持続可能性やコンセプトについて情報共有がされた。それらを受け、午前のグループワークとして「居心地の良い空間づくり」について議論が行われた。

午後の部は、まずOCsメンバーである岩佐祐吾氏より、過去の提言書で大学に実施が提案された内容の進捗確認報告が行われた。実現が完了したものとしては、全キャンパスの再生可能エネルギー100%、龍谷ソーラーパーク増設や環境プログラム（講義）の実施などがある。取り組み中のものは瀬田キャンパスでのソーラーシェアリング実施や龍大バザールの教科書回収や販売などがあげられた。一方で、スクールバスの本数見直しや食分野における取り組みは依然として未着手であることが共有された。

その後、NPO法人気候ネットワークの豊田陽介氏から、グループワークにつながる論点提起があった。龍谷大学らしい脱炭素の取り組みは学生主体で創出することができること、そして脱炭素は「我慢の省エネ」ではなく「豊かさの創出」へ転換していくことの重要性などが伝えられた。また、エネルギー・建物や通勤通学、教育、地域連携といったそれぞれ分野で考慮すべき課題や視点など、その後の議論のヒントも提供された。



## 5-2. 運営体制

龍谷大学LORC、学生団体OCs、サステナビリティ推進室で実行委員会を組織し、企画から運営まで担った。

会議当日はOCsから5名と国際学部の学生1名がファシリテーターとして参加し、グループディスカッションの円滑化、活発化に重要な役割を果たした。また、学生ファシリテーターとしての姿勢・スキルを身につけるため、事前にファシリテーション研修を開催し、受講したメンバーが気候会議のファシリテーターを務めた。

### 【実行委員会メンバー】

政策学部	教授	的場 信敬
//	教授	村田 和代
国際学部	教授	斎藤 文彦
先端理工学部	教授	奥田 哲士
//	准教授	横田 岳人
サステナビリティ推進室		
学生気候会議OCs		

## 5-3. 過去提言書の進捗確認の概要 (OCs)

2021年に第一回学生気候会議が開催され、翌年第二回学生気候会議の後に初めて提言書が作成された。以来、毎年、学生代表が大学長に直接提言書を提出している。

学生が大学に具体的な取り組みの実施を提案する提言書について、2024年度第4回の気候会議にてOCsメンバーが「過去提言書の進捗確認」を実施し、学生気候会議当日にその報告をするようになった。今年度も同様にOCsメンバーが報告を行い、大学側が提言通り取り組みを進めているか確認を行った。サステナビリティ推進室の協力により、それぞれの部門別【エネルギー部門・建物/キャンパス部門・通勤/通学部門・食部門・ごみ/省資源部門・教育/インセンティブ部門・地域連携部門】に即して進捗確認を行う。

以下、それぞれ「実現済みの活動」「進行中・取り組み中の活動」「未着手の活動」としてまとめる。

「実現済みの活動」 (一部抜粋)		
部門	提言	実施内容
エネルギー	再エネ100%実現	3キャンパスで使用する電力すべて再エネに
建物	龍谷ソーラーパーク増設	増設済。新棟にも設置済み
通勤/通学	自転車置き場の増設	深草体育館裏、朋友館に設置
	自転車通学の促進	アシスト付きバイクシェアリングの導入
教育	サマーセッションを活用した学部横断での「仏教SDGs」を学ぶ機会の提供	仏教SDGs概論、教養教育科目として開講
	環境プログラム(講義)の実施	必修講義は未着手。2027年度、環境サステナビリティ学部の設立により大きな前進。
地域連携	龍谷の森イベントの定期開催	ゴミ拾い、職員向けの森ツアーを不定期で開催
	木材活用ワークショップ	2023年度実施、一回のみ
	地域での環境に関する講座の実施	環境省職員のアカデミック講座、今年度も開講予定

### 参考 - 過去の学生気候会議提言書

2023年度提言書提出の様子と提言書のダウンロード  
<https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-15032.html>  
 2024年度提言書提出の様子と提言書のダウンロード  
<https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-16726.html>

「進行中・取り組み中の活動」 (一部抜粋)		
部門	提言	実施内容
建物	瀬田キャンパスのソーラーシェアリング	昨年引き続き検討中
	龍谷の森整備	株式会社ロゴスコーポレーションと包括的連携協定を締結→(龍谷の森内の整備を検討中)
ごみ/省資源	大学公式ボトルの販売	昨年度ゼミの団体がデザインを作成。次の段階が販売
	Campus HUB の設置	深草に Campus HUB の設置 (職員の業務効率化、フリーアドレス、ペーパーレス化)
	龍大バザールの教科書回収、販売	サステナ Daysにおける古着販売、古着回収 BOX設置など
教育	学生・教職員への伏見への帰属意識を高めるイベントを企画・実施	伏見連続講座 現在断念中
地域連携	親子セミナー、学習会・イベント開催	地域企業向けのカーボンフットプリント算定講座の実施

「未着手の活動」 (一部抜粋)	
部門	提言
エネルギー	電気使用量は高くないが、深草芝生エリアのモニターを停止するべき
建物	和原館ガラス壁面にグリーンカーテンの設置 (成就館は設置済)
通勤/通学	スクールバスのサイズと運行本数見直し
	ポータルサイトでの事前予約制
食	食堂やカフェテリアの食品廃棄量の可視化
	廃棄物処理方法の明示
	カトラリー (お箸、スプーン、フォーク等) の有料化
ごみ/省資源	別り損じ紙回収ボックスを全てコピー機に設置

龍谷大学学生気候会議から提言された案が大学の気候ガバナンスの一環として実行されていることは、学生にとってこの会議が非常に有意義なものだと感じさせる。

今回の進捗報告を通じて気づいたことは、ソーシャルインパクト・制度設計・外部連携等によって実現可能性が変化することである。現在実行されているものには仏教SDGsや龍谷の森活用がある。これらは気候ネットワーク豊田氏が話されていた“龍谷大学らしい脱炭素”のよい例であり、大学の価値を高めながら脱炭素に取り組むことができるため実現に至りやすいのではないかと感じた。その一方で比較的大学外との連携が多い食部門では、実現されたものが少ない。連携企業に変革を求めることから実現には時間がかかるのではないかと感じた。

総じて、ゼロカーボン・ユニバーシティを目指す大学としては内部の変革だけでなく、将来的には地域や企業との共生についても考慮しなければいけない。

#### 5-4. ファシリテーション・グラフィック成果物

右記QRコードより  
閲覧できます。



#### 5-5. メディア成果物掲載一覧

2025龍大学生気候会議1日目（瀬田）-ホームページニュース  
<https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-17829.html>  
 2025龍大学生気候会議2日目（深草）-ホームページニュース  
<https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-17847.html>  
 龍谷大学学生気候会議ホームページ  
[https://www.ryukoku.ac.jp/about/activity/global\\_warming/club\\_setup/cl02.html](https://www.ryukoku.ac.jp/about/activity/global_warming/club_setup/cl02.html)  
 広報誌「龍谷」  
<https://online.fliphtml5.com/ouajtn/ugnp/#p=43>  
 産経新聞 2025年12月28日【特集】14

#### 5-6. グループワークの提案内容の詳細

以下、各グループのファシリテーターによるグループごとの議論内容のまとめである。

1日目：瀬田キャンパス

議論：龍谷の森の利活用について

A班	<p>「龍谷の森」の活用について、龍大生や地域の方々に広く知ってもらうことが大切であると考えた。そのため、ハイキング、学び、活動の3つの視点で活用していくことを提案する。</p> <p>ハイキングのスタート地点にスタンプラリーや植生・生態系について説明されたパンフレットを配布できるように設置。参加者はそのパンフレットを参考に、植生や私たちが普段食べているキノコを始めとした食べ物が本来どのような環境で育っているのかについて学び、生態系に対する理解を深めることが出来る。</p> <p>また、参加者の年齢に応じた活動の提供も検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子供たちには落ち葉を使うなどした自然に触れるアクティビティ</li> <li>・中学生以上の参加者には安全面を考慮した森のツアーを実施</li> <li>・「龍谷の森」を他大学の学生の研究のために開放</li> </ul> <p>これらの活動を通して、林に入ることが楽しい、もっとこのような環境に触れたい、という自然環境の保護に対する前向きな姿勢を参加者に促す。</p> <p>情報発信の方法として、ハイキングや森のツアー中に参加者に宣伝したり、SNSやポスターを活用するほか、新種の植物等が発見されたときは龍谷大学の外にも大々的に発信する。</p> <p>運営は任意で集まった人々で団体を結成し運営することを提案する。OCsや「龍谷の森」を授業で活用している学生に積極的に参加してもらうことも一つだろう。運営への参加を任意にすることで、「龍谷の森」に興味がある意欲ある学生、教員が集まり、活動がにぎわうことを期待する。</p> <p>私たちの理想とする未来はこれらの活動を通して、今は希少で特別な存在である「龍谷の森」が、希少で特別な存在ではないもっと身近な場所として認識されることである。「龍谷の森」は自然と人間の持続可能な共生のための良いモデルだと考える。このような環境は、気候変動による被害を年々深刻に受けている私たち人間にとって必要不可欠であり、さらに広まるべきである。「龍谷の森」に入ってアクティビティを経験することで、自然環境を守ることが重要なことであると理解し、地域の人々が自ら環境保護活動に参加するようになることが、「龍谷の森」を活用する意義の一つである。</p>
B班	<p>「龍谷の森」を舞台に、学生や地域の方々が森とふれあいながら、森を守ることと上手に活用することの両方を体験的に学ぶことが大切であると考えた。そのため、「森を残す」だけでなく、手入れし、使い、次につなげていくことの大切さを学ぶことができる体験型のプログラムを提案する。対象は龍谷大学の学生、地域の方、高校生や小中学生など、幅広い世代とする。</p> <p>まず、森の手入れ体験として、龍谷の森で行う間伐作業を体験できるプログラムを実施する。主に学生や高校生を対象とし、実際に森の管理に関わることで森の維持管理の重要性について学ぶ機会とする。</p> <p>また、伐採した木を活用した選択式のプログラムとして、以下の活動を提案する。</p>

	<p>伐採した木を使ったものづくり（木のアクセサリやお茶碗作り、DIY体験、ワークショップ）をしてもらう。自分たちで切った木が身近なモノに生まれ変わる体験を通して、資源の循環について理解を深めることができる。</p> <p>次に、秋冬ならではの森イベントを開催する。森を歩きながら落ち葉拾いを行い、集めた落ち葉を使って焼き芋体験を行う。焼き芋は小学校の授業の一環として育てたお芋を使用することで、教育活動とも連携する。</p> <p>また、「キノコの木」を育てる体験をしてもらう。間伐木を使ったキノコ栽培を行い、参加者や学校ごとに好きな木を選んで育ててもらおう。環境教育や食育にもつながる活動となる。</p> <p>さらに、伐採だけで終わらせるのではなく、苗木を植える体験も行う。これにより、森と長く関わっていく意識を育てることができる。</p> <p>これらの活動のポイントとして、学生主体（サークルやゼミなど）が中心となって運営することが挙げられる。また、森の手入れからものづくりまで一連の流れを体験できる構成とすることで、森の役割や資源の循環について理解を深めることができる。さらに、学生や地域の人、子どもなど幅広い世代が参加できるようにすることで、多様な人々が楽しみながら森と関わる機会を生み出すことを目指す。</p>
C班	<p>「龍谷の森」を活用し、地域住民との交流の場を作ることが重要であると考えた。現在の課題としては、森の日常利用が少ないことや、地元の方があまり利用していないこと、さらに地域との連携が十分に生まれていないことなどが挙げられる。</p> <p>これらの課題に対して、地域との交流を生み出すための取り組みとして、以下のイベント・立ち寄りスポット・製品化の3つの視点から、「龍谷の森」を活用することを提案する。</p> <p>まず、「龍谷の森」で自然を体験できるイベントを開催する。具体的には、山菜採り体験やハイキングクラブの実施、龍谷の森の木材や廃材を使った手作り歩道作り、森の宣伝活動、落ち葉や枝を使った火起こし体験などのイベントを行う。</p> <p>次に、「龍谷の森」の中に人が気軽に立ち寄れる場所を整備する。具体的には、コミュニティ食堂の設置やベンチ、小さな小屋の設置、GreenDeckの設置、広場の整備などを行い、人が集まりやすい環境を整える。また、大学内に保育園を設置したり、松茸を育てたりするなどの取り組みも検討する。</p> <p>さらに、「龍谷の森」の資源や体験を活かした活動を展開する。具体的には、育てた食材の販売やたけのこ掘り体験、製品開発や商品化などを行う。</p> <p>これらの取り組みを通して、「龍谷の森」を地域の人々が気軽に訪れ、交流できる場所として活用することを目指す。また、森をきっかけとして地域とのつながりを深めることで、「龍谷の森」の利用促進と地域連携の強化につなげることを目的とする。</p>
D班	<p>「あつまれ！龍谷の森」と題し、「龍谷の森」を活用するためのプログラムを提案する。「龍谷の森」を、研究・学習・イベント・整備の大きく4つの視点から捉え、それぞれの視点から森の活用方法を考えた。</p> <p>まず、研究用としての森を残し、生物調査などができるフィールドを確保する。研究活動を継続できる環境を維持することで、自然環境についての理解を深めることができる。</p> <p>次に、研究成果などを共有する場として森を活用し、地域住民や子どもを対象とした学びの場とする。自然環境について学ぶことができる教育の場として確立させることを目指す。</p> <p>また、森をより身近に感じてもらうため、定期的にイベントを開催する。森林祭りの実施や森のカフェの設置などを通じて、自然の中で楽しめる場所を提供する。さらに、人数制限を設けたツアーを観光客向けに開催することも提案する。これにより、「龍谷の森」の認知向上につなげることを目指す。</p> <p>さらに、森の環境を整備し、安全に利用できる環境を整える。整備を行うことで、学習だけでなくイベントなど多様な活動を行うことができるようにする。</p> <p>これらの活動を通して、研究や学習、交流など、多様な目的で森が活用されることで、「龍谷の森」が多くの人にとって身近な存在になる。</p>

E班	<p>「人と森との共生（ともいき）龍谷ツアー」と題し、「龍谷の森」を舞台に、学生・地域・農家・子どもが関わり合いながら、森と人との共生を体験的に学ぶことができる活用方法をいくつか提案する。</p> <p>一つ目に、教育や学びの場としての活用を提案する。深草キャンパスや大宮キャンパスの学生にも「龍谷の森」を知ってもらうため、授業やゼミで森を活用する。また、登山（散策）をしながら森の役割や自然について学ぶ機会を設け、毒性のある植物とそうでない植物を教える学習プログラムを実施する。さらに、龍谷大学生向けの森ツアーを行うことで、学生が森に関わるきっかけをつくる。</p> <p>二つ目に、地域や農家との連携を通じた活用を提案する。農家の方と協力して「龍谷の森」を活用したいだけ作りを行い、地域の人にも参加してもらう。また、農家の方へのお礼として肥料となる落ち葉や土を提供し、循環型の取り組みにする。収穫したしいたけはスーパーで販売し、商品に「龍谷の森ツアー」のQRコードを添付することで活動の周知につなげる。これらの活動には農学部や政策学部、経営学部が関与することを想定している。</p> <p>三つ目に、森を歩きながら自然を体験する活動を提案する。森を散策しながら自然を体感することで、参加者が森の環境に親しむ機会をつくる。また、散策の途中で枝や葉などを集め、後のものづくり活動に活用する。</p> <p>四つ目に、自然資源を活かした活動を提案する。例えば、落ち葉を活用した取り組みや、落ち葉や乾いた木をキャンプの火種として活用する取り組みを行う。また、倒れた木を活用して龍谷大学のオブジェを制作するなど、森の資源を無駄なく活用する。</p> <p>五つ目に、アートやものづくりの活動を提案する。落ち葉や自然素材を用いたアート展覧会を開催するほか、地域の幼稚園や小学校と連携し、枝葉を使った小物作りを行う。子ども向けの活動としては、枝や葉を使った作品作りや、正月のしめなわ、おせちの飾りなどを制作する。また、大人向けには仏教的要素を取り入れたリース作りや、お寺風の建物やツリーを制作する活動などを行い、龍谷大学らしい視点を取り入れた体験を提供する。</p> <p>六つ目に、健康や交流の場としての活用を提案する。運動不足の大学生を対象にしたハイキング企画を行い、森を「気軽に体を動かせる場所」として活用する。また、地域の人に参加できる登山体験なども企画し、森を通じた交流の場をつくる。</p> <p>これらの企画の特徴として、学部横断で学生が関わる点や、龍谷大学らしい仏教的な視点を体験的に学べる構成になっている点が挙げられる。また、大人も子どもも参加できる開かれた森づくりを目指している点も特徴である。</p>
----	--

## 2日目：深草キャンパス

### 議論①：キャンパスにおける居心地のいい空間づくりについて

1班	<p>議論のスターティングポイントとして、まず現在の課題を整理し、それに対する解決策を考えた。一つ目に、居心地の良い空間づくりについてである。現在、「る」の森の一階は移動ルートと重なっているため人が密集しやすく、落ち着いて過ごしていくという課題がある。また、太陽光が感じにくい場所がある一方で、逆に日差しが強すぎて作業の妨げになる場所もある。さらに、道路を挟んだ慧光館などの新棟側ではコーヒーを購入できる場所が少なく、不便さがあることや、利用頻度が少ないという点も課題として挙げられた。</p> <p>これらの課題に対する解決策として、まずスペースの分散を図ることが考えられる。例えば、密集度を可視化する仕組みを作ることで学生が混雑を避けて利用できるようにする。また、「る」の森一階にあるアロマを他の階にも設置し、二号館側から橋を渡って来た人が二階を利用しやすいように店舗や自動販売機も設置する。さらに、緑化した空間で講義を行うことやイベントを開催すること、カーペットに緑色を使用することなどによって空間の雰囲気を変える。加えて、太陽光の当たる場所には寝転べるスペースなどのリラックス空間を設け、太陽光があまり入らない場所には照明の色度や明度を調整して学習空間として活用するなど、空間の特性に応じた使い分けを行う。</p> <p>二つ目に、脱炭素化についてである。現在は紙の使用量が依然として多く、大学が行っている脱炭素の取り組みについて学生があまり知らないという課題がある。また、脱炭素について学ぶ機会が少なく、認知や教育の不足も指摘された。</p>
----	--

	<p>これらの課題に対する解決策として、まず周知を強化することが挙げられる。オープンキャンパスやキャンパスツアー、授業などの場で大学の取り組みを紹介することや、ゼミ選びの際に脱炭素化の取り組みを紹介することなどが考えられる。また、エアコンの省エネ設定温度やその効果について説明することで、学生の理解を深めることも重要である。さらに、取り組みの可視化も有効である。例えば、発電から電力使用までの流れを示す掲示板を設置したり、太陽光発電のモニターを目につきやすい場所に設置したりすることで、エネルギーの流れを分かりやすくする。また、大学の取り組みやエネルギーの仕組みをアニメーションなどで紹介することも提案された。加えて、イベントやルール作りによる取り組みも考えられる。大学公式の環境貢献賞を設けたり、文化祭などで留学生とともに各国の取り組みを比較するイベントを開催したりすることで関心を高めることができる。他にも、古紙回収ボックスの設置や印刷ポイントの見直しなど、制度面での改善も提案された。</p>
2班	<p>深草キャンパスの新棟がより多くの学生に有意義に活用されることを目指し、「使い方の発明」をテーマにアイデアを考えた。使い方の発明は「脱炭素」「自然共生」「居心地」の三つの観点から検討し、それぞれのアイデアがどの程度「龍谷大学らしい」ものかについても考えた。具体的には、龍谷大学ならではの特徴を表しているか、他大学や地域にとっても汎用性が高いものであるかという観点から整理した。これは、龍谷大学が取り組む活動の優先順位を考える際に参考になるだろう。</p> <p>一つ目に、脱炭素に関する提案として、キャンパス内でゴミを出さない環境づくりが挙げられた。現在、生協やコンビニ、キッチンカーで販売されている商品にはプラスチック包装が多く、学食が混雑しているということもあり、多くのゴミが出てしまうという課題がある。そこで、容器をデポジット制度で販売するキッチンカーを奨励したり、パンを個包装ではなく袋から出した状態で販売したりすることで、ゴミを出さないキャンパスライフを目指すことを提案する。また、講義資料として配布される紙のプリントを減らすために、パソコンの持参を推奨することも脱炭素化に向けた取り組みとして挙げられた。これらの取り組みは他大学でも実施可能な汎用性の高いアイデアであると考えられる。</p> <p>二つ目に、自然共生の観点では、学生が深草の森に水やりを行うことで自然と触れ合う機会をつくるという提案があった。これは、龍谷大学ならではの特徴を活かした取り組みであるといえる。さらに、鳥にもやさしいキャンパス環境を目指し、木を植えたり建物のデザインを工夫することも提案され、この取り組みは他大学でも実施可能な汎用性の高いものである。</p> <p>三つ目に、居心地の向上という観点では、混雑度マップを作成し、キャンパス内の建物の利用状況を分かりやすくすることを提案する。これにより学生が混雑していない場所を選んで利用できるようになり、すべての建物がより有効に活用される環境を整えることができる。このような取り組みは、キャンパス空間を学生が主体的に使いこなすという点で、龍谷大学らしさを表すアイデアである。</p> <p>四つ目に、脱炭素と居心地を組み合わせた取り組みである。学生や教職員の環境配慮行動を可視化するため、木が表示されたモニターを設置することを提案する。マイボトルの使用量が増える、ゴミの量が減る、エコな通勤・通学が増えるなどの行動に応じてモニターの木が成長する仕組みである。これにより環境配慮行動を促進することを目指す。特に深草キャンパスは公共交通機関を利用しやすい立地にあるため、エコな通勤・通学の取り組みとも相性がよいと考えられる。</p> <p>また、着なくなった衣類や使わなくなった物を販売するマーケットを開催し、リサイクル促進と地域との交流を図ることも提案された。これらの取り組みは、龍谷大学らしさもあり、汎用性も高いものである。</p> <p>五つ目に、脱炭素・自然共生・居心地の三つを同時に実現する取り組みとして、「龍谷の森」の木材を使ったワークショップの開催が挙げられた。また、これらの取り組みが学生主体で意欲的に行われるようにするためには、「る」の森をはじめとする新棟がどのような目的で設計されたのか、また大学が進めているソーラーパネルの取り組みなどを学生に広く伝えることが重要である。そのため、「仏教の思想」などの必修科目を通して、大学の環境への取り組みを学ぶ機会を設けることが提案された。これは龍谷大学らしい取り組みであるといえる。加えて、ソーラーパネルの発電量に応じて明るさが変化する電球を設置した部屋をつくることで、脱炭素化に向けた取り組みを可視化し、学生のモチベーションを高める仕組みも考えられた。これは、龍谷大学らしさもあり、他大学や地域にとっても汎用性が高いものである。</p>

3班	<p>学内の空間をより快適にするとともに、カーボンニュートラルなキャンパスを実現するための取り組みについて検討した。</p> <p>まず、学内により居心地のよい空間を広げるための工夫についてである。例えば、「る」の森のようにBGMを取り入れることや、香りによる空間演出を行うことで心地よい空間をつくることができる。「龍谷の森」の鳥の鳴き声をBGMとして活用することで、森とキャンパスの心理的距離を縮めることも提案された。加えて、座れるスペースを増やすことや、慧光館にあったアートサイエンスの展示を和顔館などにも展開すること、可能な範囲で空調の効いた空間を増やすことなども意見として挙げられた。</p> <p>次に、カーボンニュートラルなキャンパスを実現するためのアイデアとして、デポジット型マグカップの導入が挙げられた。これは、飲料を購入する際に預かり金を支払い、マグカップを返却することでその預かり金が返金される仕組みのリユース容器であり、龍谷大学にちなんだデザインを施すことも提案された。また、キャンパスの外壁にペロブスカイト太陽電池を設置することで、再生可能エネルギーの活用をさらに進めるという取り組みや、龍谷の森で発生する落ち葉を活用した暖炉を設置し、その熱を利用して焼き芋や焼きシイタケを作るという取り組みも提案された。他にも、龍谷の森の間伐材を利用して割り箸を作成し、それをキャンパス内で使用することで、資源を有効活用することも考えられた。紙の使用量を削減するための取り組みとしては、教科書をサブスクリプション形式で利用できる仕組みを導入することや、パンフレットなどの資料を電子化することが挙げられた。大学の拡張と連動して地域への再生可能エネルギー導入を促進するという提案もあった。</p> <p>地域との連携を意識した取り組みとして、地域住民も利用可能なウォーターサーバーを設置する「龍水サービス」という案が出された。これはサブスクリプション形式で提供され、龍谷大学の学生が地域へ水を届けるアルバイトを行う仕組みを想定しており、地域との交流の促進や防災時の水の確保にも役立つ可能性がある。また、電動アシスト付き自転車の貸し出しを行い、通学や地域連携活動に活用することで、移動に伴う環境負荷の低減を図ることも提案された。加えて、ジムに漕ぎ発電装置を設置し、運動をしながら発電を行う仕組みを作るという意見も挙げられた。</p>
4班	<p>「使いこなせる・リラックスできる大学空間」をテーマとして、学生がより快適に利用できるキャンパス環境について検討した。まず、学生の声として、「『る』の森に人が多くリラックスできない」「昼休みの食堂が混雑している」「教室の断熱性が低く快適とはいえない」「教室の広さと使用人数が合っていない」「学内で使える場所や機能が分かりにくい」といった課題が挙げられた。</p> <p>一つ目の提案として、壁面緑化をおこなうことが考えられる。新棟はグレーで無機質な印象が強いため、緑のカーテンを設置することで景観を改善する。また、日射を和らげることで室温上昇を抑える効果も期待できる。これにより、視覚的にも環境に配慮する大学であることを示すことができる。二つ目の提案として、大学マップの一元化である。大学をより使いこなすためには、学内の施設や機能を知らない人を減らすことが重要である。そこで、どこで何ができるのかをまとめたフード・空間マップを作成し、情報を一元化することを提案する。これにより人の流れが分散され、混雑の緩和につながる。また、大学生だけでなく一般の人でも大学を利用しやすくなると考えられる。これらの取り組みにより、大学の居心地の向上、環境負荷の低減、大学施設の有効活用、そして学生と地域の双方に開かれたキャンパスの実現が期待される。</p>

議論②：テーマ別 大学の脱炭素に向けたアイデア

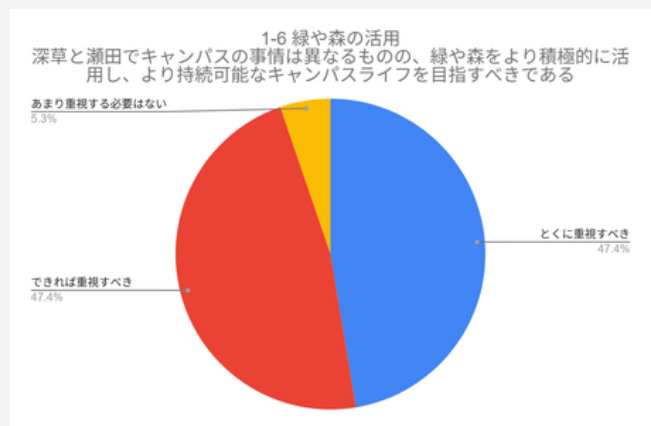
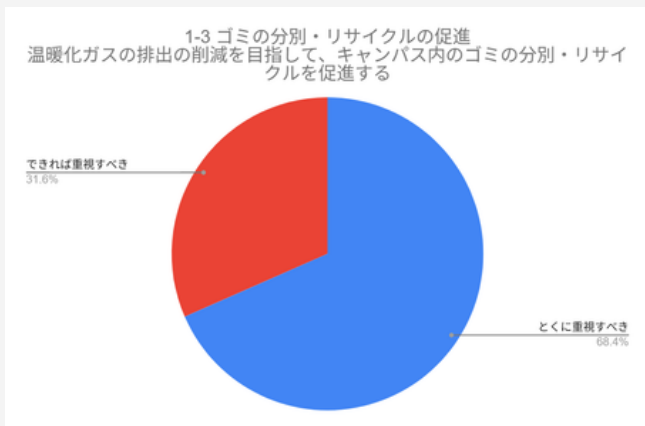
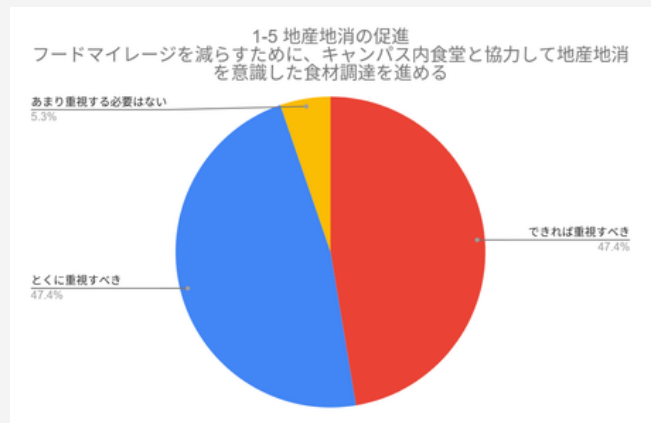
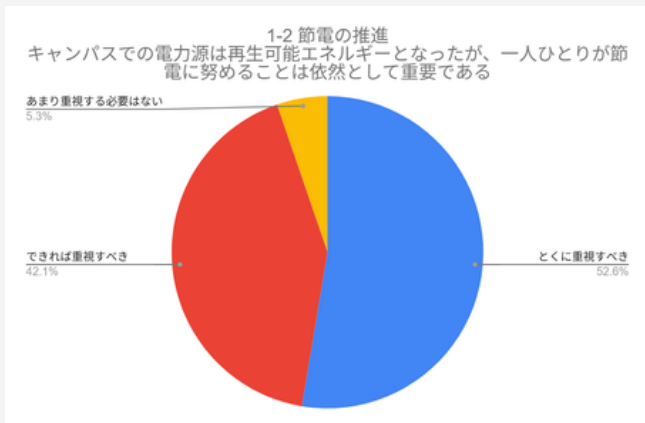
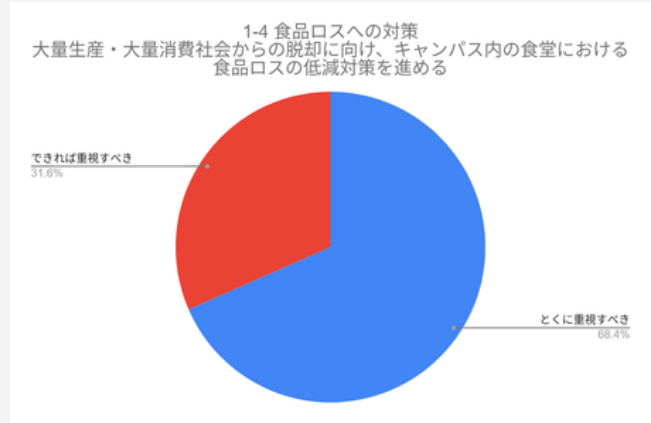
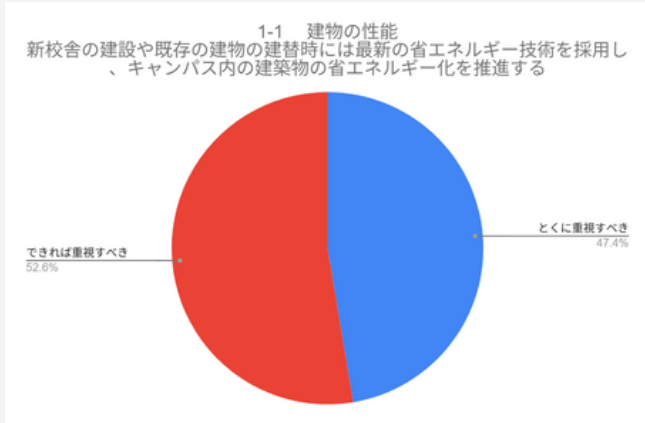
<p>1班 建物・エネルギー</p>	<p>再エネ100%で運営されている龍谷大学の建物を活用し、地域交流と地域の脱炭素化を目指す。地域住民との交流が重要であると考え、以下、短期と中長期に分けて活動の展開を検討する。</p> <p>【短期】・龍谷おにごの実施・小中高生向けに空き教室を開放（週末・長期休暇）・龍谷の森を活用したハンドメイキング会の開催・再エネ寄付の実施・瀬田のSTEAMコモンズを地域住民も利用できるようにする</p> <p>【中長期】・長期休暇にサークル発表や文化祭を開催・夏休みの自由研究に活かせる授業やイベントの実施・図書館やプールを長期休暇限定で開放・瀬田のグリーンデッキの活用・瀬田ドームを地域のスポーツクラブに貸し出す・瀬田のキッチンを活用した料理教室の開催</p> <p>【観光客向け】・EVバスを活用した観光ツアーの実施</p> <p>【地域住民・観光客の両方に当てはまるもの】・餅つき大会（龍谷の森の木を使った杵と臼を使用）・瀬田ドームで祭りの開催・大宮キャンパスの伝統建築を活かしたオープンカフェ</p> <p>【モニターの活用案】 前回の提言書では停止すべきとの意見もあったが、本グループでは廃止ではなく新たな活用方法を検討した。・パブリックビューイング・映画鑑賞会・龍谷ドキュメンタリー上映・ゲーム大会</p>
<p>2班 脱炭素教育</p>	<p>「仏教SDGs概論」といった授業が提供されているにもかかわらず、多くの学生がその存在を知らず、また関心のある学生も少ない、あるいは受講へのハードルの高さを感じているのではないかと課題に着目した。そこで、龍谷大学の脱炭素化に向けた取り組みに関心を持つきっかけとなる「つながる教育」について考えた。幼稚園のときから環境教育に関わることで脱炭素への関心を育て、小学校・中学校・高校とその教育を経験して大学に進学することで、学生がより主体となって龍谷大学の脱炭素化に向けた取り組みを実践することを目指す。また、その大学生が幼稚園児の教育に関わることで、世代を超えたつながりを生み出す長期的なプランを考えた。</p> <p>幼稚園児のうちから自然の中で遊び、自然に触れることで、楽しいという気持ちを育て、その経験が将来、「自然のある環境を維持したい」という思いをつくるきっかけになると考えられる。この活動では大学生が幼稚園児と関わることで、社会のさまざまな人々と交流する経験を得ることができる。また、野外活動に伴うリスクを減らすため、大学生が幼稚園児のサポートをする。これらの活動は、龍谷大学のボランティアセンターを中心に実施することができるだろう。さらに、大学生が環境に関する絵本や紙芝居を作成し、幼稚園児に読み聞かせを行う活動も考えられる。</p> <p>上記のような自然環境に関する経験を積み重ねることで、将来、脱炭素化政策に意欲的に参加する子どもたちを育てることを目指す。</p> <p>【龍谷大学で行うこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「仏教SDGs概論」の授業を、ポスター掲示をしたり、授業の感想を学生が共有できるサイトをつくらしたりして宣伝する</li> <li>・「脱炭素」というキーワードへのハードルを下げるため、ブランドと協力して商品開発（例：水筒やファッションなど）を行う</li> </ul> <p>→これにより、「環境に配慮する意識・行動がかっこいい」という雰囲気を作り出し、「好きなこと×脱炭素」という形でサステナブルな取り組みに参加できることを多くの学生に知ってもらう機会を提供する。</p> <p>このようなアイディアをもとに、龍谷大学が既存の脱炭素化に向けた取り組みを活かし、改善することで、学生の関心と学びの向上につなげることができる。そして、その学生たちが幼稚園や地域の子供たちと交流することで、脱炭素化を目指した「つながる教育」の実現につながると思う。</p>

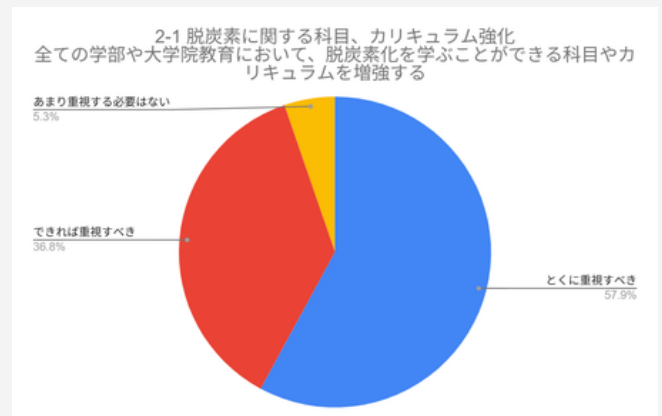
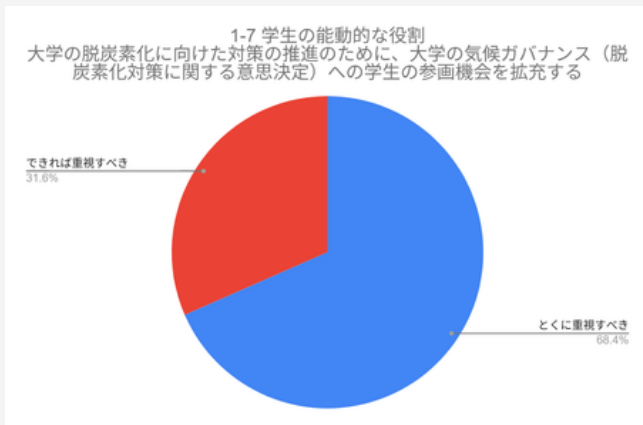
<p>3班 地域連携</p>	<p>1. 活用可能な施設・資源に関する案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・共創HUB（→研究者・企業・他大学との連携拠点として活用する。修学旅行生や課外学習生との連携、小中高校との多様な面での連携も模索。また「シェア」に関する取り組みの拠点とする。）</li> <li>・深草キャンパス（→親子向けイベントや学習会の開催場所として活用する。）</li> <li>・龍谷の森</li> <li>・寺院との連携（→TERAenergy等の事例を参考にする。）</li> <li>・龍谷大学を脱炭素のハブとする構想</li> </ul> <p>2. 具体的な地域連携の取り組み案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・親子セミナーや地域向けイベントの開催</li> <li>・観光客向けシェアボトル配布とウォーターサーバー整備（→デザインが工夫されたシェアボトルを京都駅で観光客をはじめとした人たちに配布する。そしてそのボトルだけが使えるウォーターサーバーを観光地へ拡大させていく。）</li> <li>・伏見稲荷大社との連携による環境配慮型観光モデルの構築</li> <li>・IoTゴミ箱等を活用したごみ問題対策</li> <li>・防災を意識した深草キャンパス内スタンプラリー（→深草キャンパスは災害時の避難場所として認定されており、地元住民に大学内の施設をある程度理解してもらう必要がある。そのため、龍谷の森の間伐材を活用した深草キャンパス内でのスタンプラリーを実施する。）</li> <li>・歩数計を活用した参加型企画</li> <li>・ホテルでのシェアエコバッグ・食器・箸・傘の導入（→共有エコバックをはじめとする、シェア可能なアイテムのホテルでの貸し出しを行う。観光客はスーパーで惣菜や紙コップなどを買ってきて、ホテルで食事を済ませることが多いようである。このような場面を想定し、ホテルに龍谷の森の木材も可能な限り利用したシェアエコバックやシェア食器、シェア箸を置いてもらうことで、観光客が出すごみを減らす取り組みを拡大させていく。）</li> <li>・学内でのシェア教科書・シェア本の取り組み拡大（→紙をあまり使用しない体制を構築する。）</li> <li>・環境配慮型カーシェアの導入拡大への寄与</li> <li>・大学で余っている教室を地域の人に貸し出し、大学が発電したクリーンなエネルギーを地域の人に余すことなく利用してもらう。</li> </ul> <p>3. 他大学との連携案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・芸術系大学や伝統工芸系学校とのデザイン連携</li> <li>・他大学の環境系取り組みとの情報共有や報告会</li> <li>・功德プロジェクトを他大学へ展開</li> </ul> <p>4. 企業との連携案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・功德プロジェクトの善行一覧の中に、連携企業とのインターンも含める</li> <li>・環境に対して有益な取り組みをされている企業の人を呼んで講演会を行う（→地元の人も呼んで地元住民・企業・大学の連携を図る。マイボトルやマグカップ、ホテルでのシェアエコバック、シェア食器、シェア箸、シェアスプーン、シェアコップの開発と普及にも貢献していただく。）</li> </ul> <p>5. 観光客との関わり方に関する案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発電体験と連動した入場料割引</li> <li>・間伐材を活用したお守りやポストカードなどの木製ノベルティの製作</li> <li>・寺社でのデポジット型マグカップ導入</li> <li>・寺社をつなぐサステナブルツアーの実施（→木で作ったレア御朱印の拡大）</li> </ul>
<p>4班 「通勤・通学」</p>	<p>テーマ：環境負荷を減らし、大学と地域をつなぐ移動の仕組みづくり</p> <p>【現状の課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学への移動手段が限られており、環境負荷が大きい</li> <li>・瀬田駅～瀬田キャンパス間のアクセスが不便である</li> <li>・学生と地域住民の移動が分断されている</li> </ul> <p>【提案内容】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 龍谷大学のスクールバスをすべてEVバスにする CO<sub>2</sub>排出量を削減し、大学の環境配慮の姿勢を目に見える形で示す。</li> <li>2. 瀬田駅～瀬田キャンパス間にスクールバスを運行する 公共交通との連携を強化し、通学の利便性を向上させる。</li> <li>3. 電動自転車を用いたシェアサイクルを導入する 大学生だけでなく地域住民も利用できる移動手段とし、街全体のエコ化を図る。</li> </ol> <p>【利用イメージ】</p> <p>住宅地（一般の方）→瀬田駅（大学生）→大学（大学生）→瀬田駅（一般の方）→住宅地</p> <p>【期待される効果】</p> <p>環境にやさしい移動手段の定着／自動車利用の抑制によるCO<sub>2</sub>排出量の削減／大学と地域のつながりの強化</p>

## 5-7. 「学生気候会議 意見集約」と回答結果

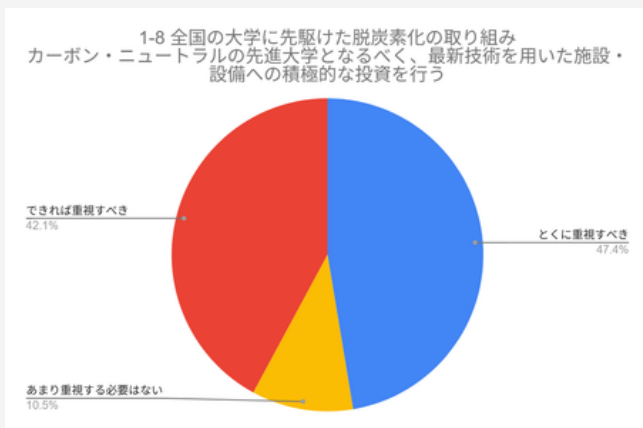
※各項目の選択肢はすべて、「とくに重視すべき」、「できれば重視すべき」、「あまり重視する必要はない」、「まったく重視する必要はない」の4択とした。

1

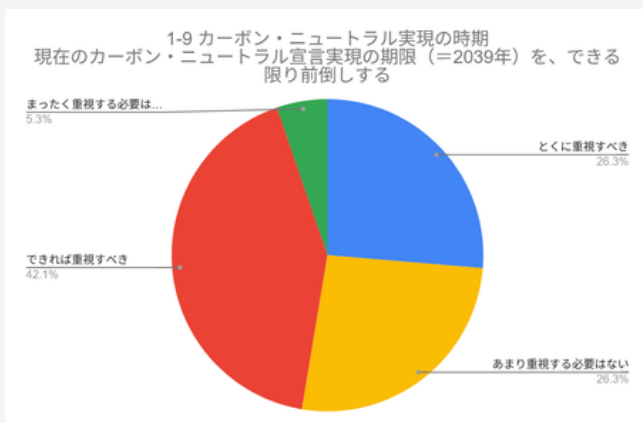


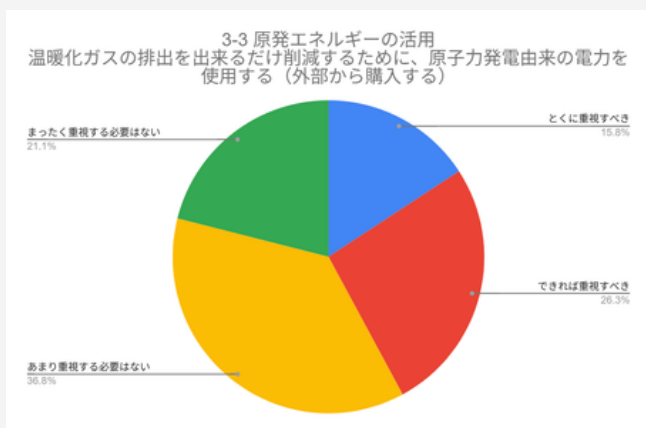
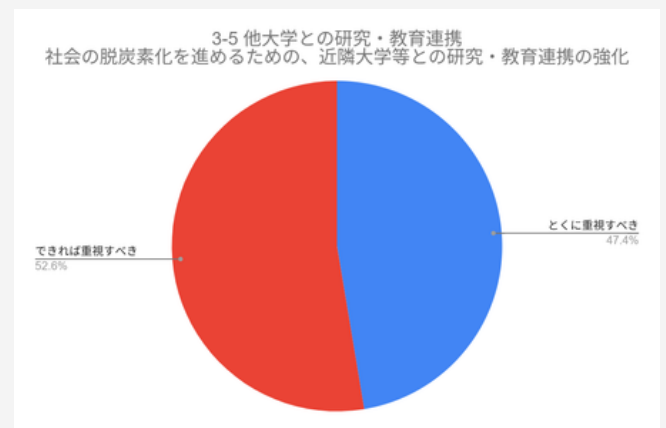
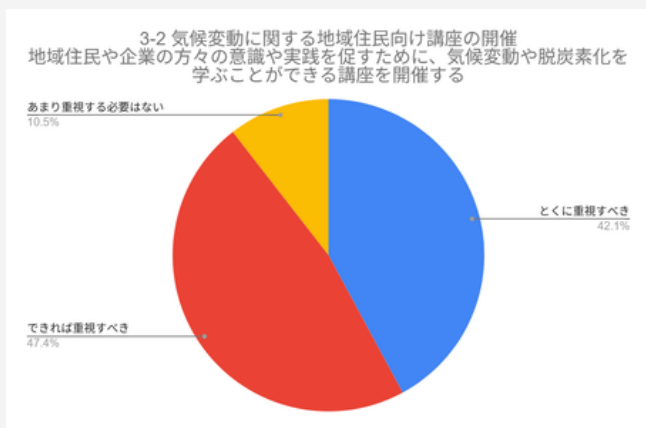
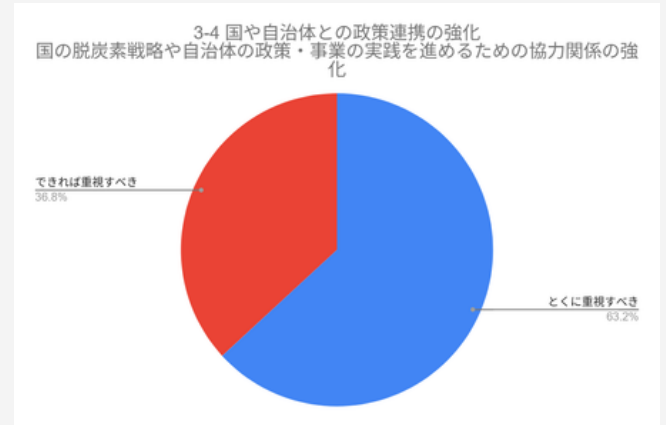
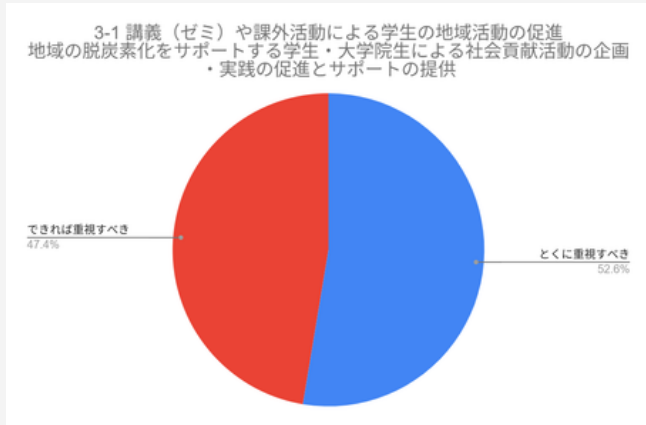


2-2 【自由記述】脱炭素社会への挑戦において、あなたはどのような人材になりたいですか



- ・関係する発信に反応して個人で実行する立場でありたい。
- ・環境意識を強く持って、他人任せではなく自分がやるんだという気持ちで取り組む
- ・プロジェクトとして実行できる人材
- ・学生の視点でみんなに影響を与えられる人になりたいです。
- ・現実的だけど、豊かなアイデアを出せる人材
- ・自分で出した意見を色んな立場の人を巻き込んで実行出来るような行動力のある人材になりたいです。
- ・自分は環境について興味がありますから、今後は研究者として活動できればいいかなと思います
- ・先駆ける第一人者になれなくても、挑戦する組織として活動する人材になりたい
- ・仏教の面で関わる人になりたい
- ・環境保護活動に携われる職につきたいです。
- ・実際に小さな行動から大きなことを起こせるような人材
- ・化学の視点から活躍が出来るような人材になりまいます
- ・環境配慮ができる人
- ・会社で働き始めた時も、脱炭素社会を実現出来る取り組みを組織として推し進めたい
- ・植林や木材の活用を行う人材になりたい。
- ・多様な視点で物事を見る人
- ・世の中に脱炭素に関する、正確かつ興味深い教育を普及させたい。
- ・地域の課題を見つけて、より持続可能な社会になるようなアイデアを出して、実現できる人材になりたいと考えています。その際、現状把握をして本当に問題になっていることを考察する必要があると考えるので、その面も考慮できるようにしたい。
- ・アイデアを出すことは大事なのですが、出てきた意見を分析して持続的な状況にすることができる人材になりたいなっと思いました。





3-6 京都や滋賀の脱炭素化 龍谷大学の位置する京都や滋賀のカーボン・ニュートラルへの挑戦について、あなたが思うことを自由に記載して下さい。【自由記述】

- ・多くの人を巻き込むにはきっかけづくりが大事
- ・京都は学生の街ということもあって、もっと学生が参加する取組を推進すべき
- ・関西からそのまま日本、世界へと広げていきたいです
- ・気候会議に参加するまで脱炭素についてあまり考える機会がなかったので、こういう人にとってこの挑戦は宣伝の効果もあると思いました。
- ・よく取り組んでいるけど、もっと大学間の連携を拡大したら面白そう
- ・龍谷大学は大きな影響を与えられる可能性を持っていて、自分の行動も大切になるんだと感じてそのチャレンジの一員になりたいと感じました。
- ・1つの大学の中にあることだけではなく、大学と繋がるところ全部ゼロカーボン、そして、ゼロカーボンの範囲を広げていくことも重要なことかなと思います。
- ・大学の多い京都にあるからこそ、カーボンニュートラルへ挑戦し、その実績を他の大学へいい影響として、京都から全国へ広めていってほしい
- ・すばらしい取り組みだと思います。過激すぎて、悲しい思いをする人が出てくるのは良くないと思いますが、みんなが生きやすくなるように上手く進めていけばとてもいいと思いました

- ・実際に行われている事業や情報、取り組みをもっと知りたいと思いました。
- ・自治体レベルではなにをやっているのかをあまり知る機会がないため、もう少し知る機会が必要。大学との連携をして勤めている点で、地域に根ざしたことができていると思う。
- ・学生気候会議に参加するまではカーボンニュートラルへの活動でどんな事しているのが知りませんでしたし、興味もありませんでしたが、この会議に参加して興味が湧いたので、現在京都や滋賀が将来どんなことを目指しているのか見ていきたいと思いました。
- ・学内の再生可能エネルギー利用率100%はすごいと思った。学内の省エネ率を増やし、再エネを投資できるぐらい成長してほしい。
- ・学生にあまり伝わってない気がするため、もう少し大々的に言ってもいいと思う
- ・これからも挑戦を続けて、カーボン・ニュートラルで日本を引っ張って行って欲しいです。
- ・学生だけでなく、高齢者の方や企業人も含めた全世代での取り組みを定期的に行うのが良いかと思いました。
- ・カーボンニュートラルの取り組みが、ダイレクトに市民や企業に還元する制度が整っていないと、いずれ疲れ始めるため、まずその仕組みを整えるべきだと思う。
- ・今で十分よい取り組みを行えていると感じているので、もっと多くの大学や地域に広げていく機能を果たしていただきたいと考える。
- ・観光地が多いので、海外国内から来た人に対してポジティブな環境の影響を与えることも大切なかと考えました。

